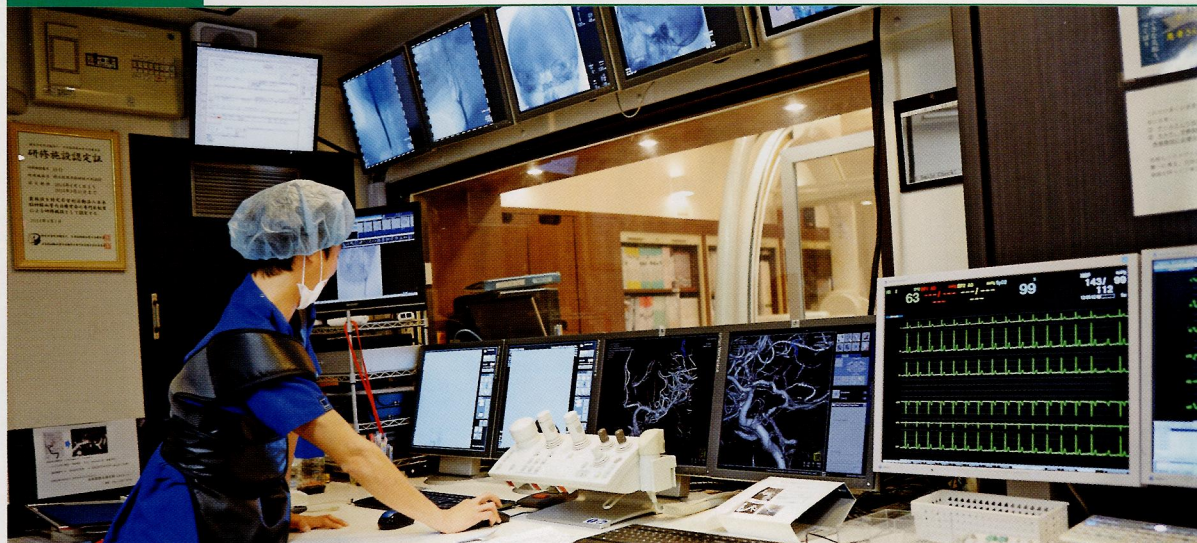


ちょっと拝見

超急性期に対応する脳卒中急性期中核病院



脳血管造影 脳卒中入院患者数は、神奈川県でトップ。時間との戦いとなる処置段階は医師の高度な先進医療技術と最新設備を使いこなす技師が支え、スキルを磨いたパラメディカルスタッフが受け止める「チーム新都市」。優しい笑顔と明るい挨拶の声が絶えない。

12 床を有する SCU

IMS（イムス）グループ横浜新都市脳神経外科病院（森本将史院長・317床）は、クモ膜下出血、脳出血、脳梗塞などの脳卒中や脳・脊髄腫瘍、さらに頭部外傷などの診断および治療を目的とする脳神経外科専門病院だ。1985年（昭和60年）に開設以来、「新都市病院」という愛称で親しまれ信頼を獲得しつつ、地域における脳卒中急性期中核病院として発展してきた。

1日平均の外来患者数は約300名で、病床稼働率は87%、平均在院日数は8日ということだ。脳外科に限れば、平成25年度実績として、救急搬送件数は約2,800件、手術件数690件（うち血管内手術243件）、脳動脈瘤治療実績（DPC調査）県下1位、全国8位、脳卒中患者退院数（DPC調査）県下1位、全国14位、と脳卒中関連病院としては全国トップレベルの実績である。

同院の陣頭指揮を執る森本院長の下、10名のスタッフからなる脳神経外科を中心に、神経内科、整

形外科、内科、循環器内科、リハビリテーション科、麻酔科の専門科を有し、現在同院には28名の常勤医師を含む500名近い職員が働いている。

診療圏の中心となっているのは、横浜市青葉区、都筑区を中心とする横浜市北東部と川崎市北西部一帯である。近隣に大学病院の救急部が幾つかあるなかで、これだけの救急搬送数があることから、まさに地域への密着感がより強い病院といえる。立地は最寄駅が、東急田園都市線江田駅（徒歩10分）と横浜市営地下鉄ブルーライン中川駅（徒歩15分）で、国道246号をはじめ、アクセスに当たっての道路事情も悪くない。

医療体制の特徴は、脳神経外科の常勤専門医を中心とする、他科の医師、パラメディカルスタッフによる「チーム医療の徹底」という点にある。超急性期の脳卒中疾患に迅速に対応するために、24時間365日の救急医療体制が構築されているが、搬送されてきた患者に対して一分一秒でも早く治療を開始するためには、医師だけでなく、パラメディカルとの連携が不可欠である。それに加えて、状態が安定した脳卒中患者のリハビリにおいて中心的役割を果

神奈川県・IMS（イムス）グループ 横浜新都市脳神経外科病院

〒225-0013 神奈川県横浜市青葉区荏田町 433
http://www.yokohama-shintoshi.jp



たすのも、医師ではなく看護師やリハビリ技師などのパラメディカルである。そういった点をふまえ、同院の基本方針のトップには『より質の高い医療とサービスの提供』を「チーム新都市」として常に目指す』と掲げられていることから、森本院長の並々ならぬチーム医療への意欲が感じられる。

設備面においても、脳外科の急性期病棟だけで約90床あり、そのうち厚生労働大臣の定める施設基準をクリアする脳卒中の専用治療室 SCU（ストロークケアユニット）を12床も有しており、全国でも屈指の設備だ。森本院長は「初期段階での集中治療はとても大事で、この対応いかんで予後が全く違ってきますので、その点で、当院における SCU の存在は大きいです」と語る。

それに加えて、脳神経外科専門医が8名、脳卒中専門医が4名、脳血管内治療専門医が4名（うち指導医1名）、脳卒中リハビリ認定看護師が2名、と万全の体制を持って「断らない医療」を実践している。マスコミや専門紙誌が公表する脳卒中関連疾患における優良病院ランキング上位にしばしば登場する所以だろう。

また、循環器内科における心筋梗塞や狭心症など

の冠動脈疾患・不整脈に対するペースメーカー治療、心不全・高血圧や下肢閉塞性動脈硬化症などの末梢動脈疾患に対する診療も定評があるところで、心臓カテーテル治療は年間500症例を超え、平成25年4月からは24時間体制で救急医療を開始している。

予 後のフォローも万全

同院は急性期医療を柱としているが、一方で、内科、循環器内科、整形外科を併設し、脳疾患合併症に対するフォローも可能としている。また、高度な医療技術に加えて、リハビリテーション科を中心に脳卒中疾患には付きものの後遺症の改善、慢性期における機能回復訓練にも重点を置き、在宅医療などにも間口を広げ、ヒューマニズムを兼ね備えることによって患者の満足度を高める質の高い医療を実現させている。

回復期リハビリテーション病棟での、脳血管疾患や大腿骨頸部骨折などにより身体機能に障害を持つ患者に対し、発症後早期より適切で集中的なリハビリテーションの提供は365日対応で、地域においても定評のあるところだ。ここでもまた、病棟に専従



1月平均70~80人が受診するドックセンターの待合室（上）と結果説明室（下）



回復期リハビリテーション病棟60床入院が長期になることもあり、季節感を出す病棟にしている。60人のうち8割が脳卒中患者



毎週行われる各部署が集まるベッドサイドコントロール会議



左右障害別トイレ10年以上前の設置当時からあり、患者への真の配慮がうかがえる。

で配属されたりハビリテーション専門医2名を含む常勤医師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、看護師、ソーシャルワーカーなどで構成されるチーム力によって、個々の患者の状態に応じたプログラムを作成し、急性期から回復期、維持期にわたり、早期回復、家庭復帰を目指した高度なリハビリテーション医療を実現している。

その内容は、ハード面においてもソフト面においても実にきめ細かい。ハード面では、病棟内のトイレ、浴室といった設備は、患者が家庭に帰った時の生活を想定した訓練が行いやすいように配慮した構造となっているし、機能回復に必要なリハビリ機器も各種取り揃えられている。ソフト面においてはチーム医療の徹底を軸に、急性期から回復期への患



脳血管内治療中



SCU 看護師
飯塚さおりさん



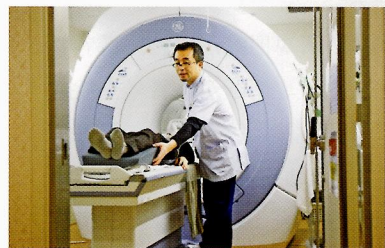
SCU 12床。脳卒中リハビリテーション看護認定看護師を配置



脳外科顕微鏡手術



オペ室は3室



MRI 3台、CT、ANGIO などの最新鋭の医療機器を装備



診療放射線技師
齋藤 誠さん



脳血管内手術の前に医師、看護師、放射線技師でカンファレンス



医事課副主任 古川理香子さん
コンシェルジュチームが、ホスピタリティの充実に力を発揮



ベッドサイドリハビリも積極的



リハビリテーション室 理学療法士38名、言語聴覚士13名、作業療法士28名が、専門医とともにそれぞれの患者にあったカリキュラムで回復を目指す。



神奈川県・IMS (イムス) グループ 横浜新都市脳神経外科病院

者の移行がスムーズに進むように、ソーシャルワーカーが中心となって、脳外科医師、リハビリ医師、看護師、リハビリ技師の各部署が集まり、週1回のベッドコントロール委員会や患者ごとに行われる病棟での総合カンファレンスを通じて、患者の状態や今後の方向性を急性期からチーム全体で把握するシステムになっている。また、退院後の医療・福祉・介護などについても相談窓口となり、在宅復帰のための住環境評価や家族への介助指導を実施している。8割以上が脳血管障害による患者への対応だが、同院の強みは、その後の病状によってさらにグループ病院を紹介できることだ。

一方、脳卒中を中心とした脳疾患の予防という観点から、同院のドックセンターでは、専門病院ならではの設備と機能を駆使した十分な精査を「ブレイン (脳) ドック」「ハート (心臓) ドック」「メモリー (高次認知機能) ドック」として提供している。センター内に入ってすぐの待合ロビーはシックな内装によってまとめられていて、心地よい「ドックの時間」を過ごすことができるだろう。利用者は時季によっても若干異なるが、月平均の利用者は70~80人ということだ。

「3C」を意識した医療推進

森本院長は、同院の運営に当たっての要諦を3つのCでまとめる。「これまでの良き伝統は十分に認識したうえで引き継いでいながらも、それに満足するのではなく、同院スタッフがチームとして「協力 (Cooperation) しあって、挑戦 (Challenge) し、変化 (Change) を起こしていく」3Cを常に意識して医療に取り組んでいけるようにしたい」というわけだ。

その前提には、「順調に変化し成長している病院組織だが、現状に甘んじて満足してしまったらそこで成長が止まってしまう」という危機感もあるのだろうが、病院運営の方針の真ん中にはいつも「患者さんの満足と安心をなによりも第一に考える病院を



救急フォーラム
救急隊との連携と、脳、循環器、整形等に関する教育を目的に、2カ月に1回開催



年2回行われる市民公開講座
(前回は550人参加)

創っていく」(森本院長) という点を見据えての3Cであることが話の端々から感じられる。

別室で同院の3人のスタッフがそのことを裏付ける話をしてくれた。

医事課副主任 古川理香子さん — 「私は病院のコンシェルジュとしての仕事が主なのですが、患者さんやご家族に、「満足」と「安心」を与える重要な役割を担っているのだと思える、いわば「土俵が一緒」感を実感しています」

画像診療部診療放射線技師 齋藤 誠さん — 「自由に発言・提案できる雰囲気が院内にあり、院長から常日頃「日本一のチームを作ろう」と励まされ、自ら工夫して提案した撮影方法を積極的に学会で発表しています」

脳卒中リハビリテーション看護認定看護師 飯塚さおりさん — 「超急性期の先端に行く病院ですが、予後のことにも心配りした医療推進とそのためチーム医療の大切さを常に意識付けてもらえる環境で、とても働き甲斐があります。希望して、半年間学校へ行って、認定看護師の資格も取らせてもらいました」

「チーム新都市」がスタッフ個人を成長させ、自然に明るい笑顔と挨拶を生んでいるのだろう。まだまだ伸びしろの大きい病院であることは間違いない。



森本将史院長